

会員の広場



「秋のあはれ」

須山 茂樹（東京）

二、三年前の一日、神奈川県大磯町に住む友人の案内で同町を散策したことがある。訪問二組の夫婦と友人の同行五人、まず、山の方に入ったゴルフ場に隣接するレストランでフランス料理を楽しみ、ゴルフコースを眺めて、主目的の海岸沿いにある旧吉田茂邸の見学へ。同邸は先に失火で焼失したが、元通り

に再建したもので、建物は新しいが収蔵の資料なども含めて一度訪れる価値がある。

婦りに際に寄ったのがJR大磯駅近くの古い茶席「鴨立庵」。同庵は三名茶席の一つで、時刻が遅く見学は叶わなかったが、門前に同庵の名の由来である近辺の情景を詠んだ西行法師の有名な和歌が刻まれている石碑がある、

「心なき 身にもあはれは 知られけり

鴨立つ沢の 秋の夕暮れ」

この碑を眺めながら、「秋の夕暮れ」を詠った三名歌があったなどという話になった。御存じの方も多いと思うが、他の二首は次のとおり。

「さびしさは その色としも なかりけり

真木立つ山の 秋の夕暮れ」（寂蓮法師）

「見わたせば 花も紅葉も なかりけり

浦の苔屋の 秋の夕暮れ」（藤原定家）

いずれも「新古今集」所収である。世に「三夕の歌」として知られるこの「秋の夕暮れ」を詠った三つの名歌により、秋を「あはれ」と思う日本人の心は定着したと言われる。

私たちは「風の音」に秋の訪れを知り、虫の音を愛おしんでそこはかとなく哀愁を感じ、ふと我が人生を想ったりする。

藤原正彦氏によると欧米の白人は虫の音を騒音と感じるそうである。左脳の働きの違いであろうか。詩人、外交官で駐日大使も務めたフランスのポール・クロード氏は「世界で滅ぼしてはならない民族は日本人である。彼らは外国から文化を輸入し、営々と独自の文化を創りあげた。」と語っていたそうであ

る。この言葉のとおりであれば、ヨーロッパ文明の優越性が意識の底にあるようでやや気になるが、氏は日本文化の真髄や日本人の感性をまさしく評価しておられたであろう。

極寒や砂漠などの苛烈な自然の中で暮らす民に日本人の感性、情緒を分かって貰うのは極めて難しからうが、「放生会」、「植樹祭」。

「針供養」などに示される日本人の動植物や物に対する優しさ、自然への思いなどが世界中の人々にほんの少々でも理解されれば、この地球の上はもう少し平和になるであろう。

「秋のあはれ」だけでは一寸淋しいので、最後に春の歌で華やかな日本の情緒を。

「清水へ 祇園をよぎる 桜月夜 こよひ
逢う人 みなうつくしき」（与謝野晶子）